

# 『ウインダミア人の扇』について

——扇の劇的効果を中心に——

土橋 初枝

(駒沢大学大学院生)

夏のワイルド・セミナーでビデオ上映された『ウインダミア夫人の扇』(BBC制作, Louis Marks 製作, Tony Smith 演出)は、映像ならではの手法で、扇の劇的効果を見事に描き出していた。そこでは、扇が人から人へ渡っていくシーンがクローズアップされ、それによって展開するドラマの構造との関係が巧みに強調されていた。扇は終始ドラマの中で、登場人物の間を巡っていくのだが、扇の受け渡しが行われる度に、それまで隠されていた新事実が露呈され、人物達の間で微妙な心理変化や人間関係の変化が生じるのである。

最初の変化は、ウインダミア卿とウインダミア夫人との間に起こる。ウインダミア卿が誕生プレゼントとして贈った扇は、夫人のもとに届くとすぐにその効果を示し始め、妻は、信頼していた夫に対して不義の疑いを抱くようになるのである。次は、ダーリントンとウインダミア夫人の間で扇のやりとりが行われるのだが、ここで見るダーリントンの変化は、最も意外なものであった。社交界の人々のナンセンスな会話や打算を痛烈に批判し、偽善を攻撃するダーリントンは、冷静で客観的なダンディーとして登場した訳だが、その彼が、ウインダミア夫人に扇を渡したとたん、全く正反対の素顔を見せてしまうのである。彼はウインダミア夫人に、それまでは秘めていた愛情を告白する。ダンディーの仮面の下には、実は、誰よりも真摯で、妥協を許さない人生観が隠されていたのである。

思わぬ事実が次々に公開され、その度に、ウインダミア夫人は、ますます窮地に陥るが、肝心の謎を明かさなければならないアーリン夫人に関しては、扇の効果がなかなか発揮されない。ワイルドは、扇の効果を逆に利用して、アーリン夫人とウインダミア夫人の間で扇のやりとりを行わせないのである。ふしだらな過去、夫との噂、魅力的な容姿、アーリン夫人は、最後まで、謎の女を演じ続けている。ウインダミア夫人を窮地から救ったのは、アーリン夫人の母性愛であったが、それも、娘には直接知らされることなく、アーリン夫人は、すぐに、元の魅力的な女性に戻るのである。

アーリン夫人の正体が最後まで明かされないこと、これは、実は、ワイルドの意図であって、ドラマのテーマと深くかかわっていると考えられる。ドラマの冒頭のウインダミア夫人とダーリントンとの会話は、モラリティー対ダンディーの議論であったが、結局、どち

りも勝利をおさめることはできなかった。ウインダミア夫人の潔癖なまでの道德観も、ダーリントンのダンディーぶりも、それだけでは、人生の解決にはならないのである。人生に必要なのは、アーリン夫人のように、ダンディーな建前と心に秘めた本音をうまく使い分けることなのだ。彼女が、

Ideals are dangerous thing. Realities are better.

と言ったように、現実を現実として認め、臨機応変に対処していく英知があってこそ、人生の勝利を得ることができるのである。アーリン夫人の仮面は、ダンディーな悪女であるが、彼女が一瞬見せた本心は、まさに、ウインダミア夫人が言った、愛と犠牲の具現であった。アーリン夫人のダンディーぶりは、ダーリントンよりも徹底しているのである。そのアーリン夫人に、スタンドプレーを演じさせたところに、ウインダミア夫人にもダーリントンにもない、アーリン夫人だけがもつ、seriousとtrivial, truthとlie, moralとdandyの両面の必要性を説くワイルドの人生観を読みとることができる。

You are marrying a very good woman.

アーリン夫人が、鮮やかに勝利をおさめたとき、charming = good になって、モラリティーとダンディーの争点は見事に解決したのである。

このように、人生の根本にせまるテーマを、扇という小道具でさりげなく説いたところに、ワイルドらしさがよく表れている。当初、“A good woman”であったタイトルをサブタイトルに変えて、扇をタイトルにもってきたことを考えても、ワイルドが、扇のもつ劇的効果を十分意識していたことがうかがえる。

舞台上で使われる扇は、古くから様々な意味を担ってきた訳だが、ワイルドはその広がりのあるイメージを十分に活用して、このドラマに well-made play と称されるにふさわしいシャレた演出をしているのである。

